

中国語圏における俳句の影響について
——俳句の中国語訳を中心に（その四）

呉
衛峰

東北公益文科大学総合研究論集第四十一号 抜刷

二〇二二年七月三十日発行

中国語圏における俳句の影響について

——俳句の中国語訳を中心に（その四）

呉 衛峰

はじめに

中国語圏における俳句の影響という課題において、「中華俳翁」と呼ばれる葛祖蘭（1887～1987）が重要な研究対象となるが、周作人¹や林林たちより注目度が低いゆえ、本格的な研究がこれからだと言っても過言ではない。

葛祖蘭は浙江省寧波の生まれで、1905年早稲田大学に留学し、1909年同大学師範研究科を卒業して帰国した。中学校や師範学校の教頭・校長を歴任したのち、1935年当時の「中国銀行」上海総店の招聘を受けて入社した。傀儡政権「満州国」支配下にあった奉天（瀋陽）、吉林、長春などの支店に幹部として勤務し、職員たちに日本語を教えていた。終戦後の1948年、上海総店に戻り定年を迎えた。中華人民共和国が成立してから、上海文史館館員を務める傍ら、日本の小説や俳句を翻訳していた。²

葛祖蘭自身も本格的な俳人であったので、本稿は葛祖蘭の俳句について初歩的考察を行う一方、葛による俳句の中国語訳の特徴を明らかにするものである。

(1) 中国語圏における俳句の影響について——俳句の中国語訳を中心に（その四）

日本俳句界に広く知られる中国人俳人として活躍時代は異なるが、葛祖蘭は子規門下の羅蘇山人（1881～1902）と同様に著名であり、句の大半は『祖蘭俳存』に収められている。1939年、「満洲国」に滞在していた虚子の弟子三木朱城などホトトギス派の俳人たちと出会い、以降おもに朱城に師事して俳句を詠み始めたという。³『祖蘭俳存』（増訂版）の冒頭には、「高濱虚子先生高足俳誌ホトトギス同人恩師三木朱城先生恵選」の句が載っている。⁴最初の二句は

新年

三木朱城師の御句集を読む 一句

読初や先づ頂いて師の句集

書初や明窓浄几五瑞の絵。⁵

となるが、いつの句か注記がない。俳誌『俳句満洲』創刊号（1943年6月）⁶に見られる三句のうち、三木朱城選「雑詠」には二首ある。

植疱瘡子は健かに母若く

夫子の道思想あるのみ釈尊。⁷

前者は『祖蘭俳存』（増訂版）に収録されているが、後者はおそらく季語の問題で割愛されたであろう。⁸⁾

この他に、「満華系俳句会発会式」という記事の末尾に一句が添えられている。

りらの華古り行く庭をにぎはせり。⁹⁾

『祖蘭俳存』は日本語俳誌の選者入選作品しか収録しない編集方針のようで、この句も増訂版に収録されていない。

また、『俳句満洲』創刊号に葛祖蘭による「俳句漢訳」コラムがあり、私見の限り、発表された葛による最初の俳句翻訳である。

寒紅や守口如瓶の語が壁に

これは私の畏友池田会一氏の句であるが戦時体制の新しき句なので私はとてもすきなのであります何遍も玩誦してお仕舞ひにとうとう漢詩に訳しました。

丁寧寒紅莫前語 守口如瓶在壁間

右の訳は漢詩としての価値があるかどうか別問題として原句の意味は十分に訳出して居ると自分ながらさう思ひます。¹⁰⁾

1943年12月に『ホトトギス』に初めて投句し、翌年1944年3月号の虚子選に入った。以下の句である。

ひのものゝ国より月の客ふたり¹¹

初投句で虚子選に入ったことで大いに勇気づけられ、後の四十年の俳句人生において大きな意義があったに違いない。

上海へ戻った後の葛祖蘭は、しばらく日本の俳句界から離れたが、1952年東野悠象の紹介で五十嵐播水の門に入り、『九年母』に投句を始めた。師の三木朱城から引き続き指導を受けていたという。『ホトトギス』¹²へも投句を続け、1979年秋にホトトギス同人となる。¹³

葛祖蘭の句について、五十嵐播水は、「花鳥を写生した句は少く、人事諷詠の句が多い。人事の句は実に自由自在といふべきである。」と評している。¹⁴

一一

葛祖蘭は高濱虚子に尊崇の念を持っており、一度も会えなかつたことを終生の遺憾と考えていたようである。たとえば下記の句がある。

生涯にま見えぬ恨み春悲し¹⁵

虚子忌とは天下桃李の哭く日なり

生涯に師の師を師とす虚子祀る¹⁶

三句目の最初の「師」とは、虚子の弟子にあたる五十嵐播水と三木朱城の事と思われる。

葛祖蘭の中国語訳『正岡子規俳句選訳』¹⁷（以下「子規俳句選訳」と略す）の内容は、「訳者の言葉」（译者的話）によると、虚子著『子規句解』から130句、虚子著『俳句読本』および虚子選『子規句集』から33句、計163句となる。本文は句の訳の他、「虚子解」と「訳者注」からなる。「跋」（書后）によると、1958年にすでに完成したが、二十年後の1985年にやっと晴れて出版できたのである。

1959年に書かれた「訳者の言葉」には、翻訳方法について以下のように述べてある。

俳句一句はただの十七文字——実際は十七音であるので、簡潔を重視し、言い尽くさないように詠まれる。中国語訳の場合、言外の意を訳出すると、余韻の美を損なうが、言外の意に触れないなら、（中国人）読者には難解な訳文になる。塩梅のちよūd良い翻訳は甚だ難しい。拙訳は長きに亙って推敲を重ね、（中略）稿を四回も改めた。¹⁸

俳句の翻訳に関する卓論であると言える。一方、「跋」の日付は出版直前の「1985年7月」となっており、「訳者の言葉」を踏まえながら、自分による二十数年前の翻訳を厳しい目で眺めている。

俳句の翻訳は、一文字の増減もできないほどのものでなければならぬという鉄則を厳守すべきである。しかしながら、この翻訳は往々にして（中国人）読者に分かりやすいものにするため、五言詩と七言詩に訳しているが、五言もしくは七言に整えようと、余計な文字を足している。確信犯的ルール違反であると言わざるを得ない。ただ、私はすでに九十九歳になっており、さらに原稿を改める気力がないのが正直なことである。¹⁹

葛祖蘭の翻訳に対する真摯で立派な姿勢に尊敬の念を禁じえないと同時に、漢詩定型訳の問題点、つまり定型を整える

ために余計な文字を足してしまうという指摘は、筆者の主張と一致するので安堵している。

三

まず子規俳句選訳「新年」季題の二句を見よう。

【原文】民の春同胞三千九百万

【漢訳】同胞三千九百万，普天同庆度新春。

林林訳・同胞三千九百万，共庆过新年。

【原文】錢湯に善き衣著たり松の内

【漢訳】年初八日内，出浴着新装。²⁰

というように、訳はおおかた五言二行もしくは七言二行の漢詩で認められている。一句目の「普天同庆」（普天同慶）とは、漢文の熟語で足された内容であるので、訳者が言う「余計な文字」にやや近いとは言え、新年の句の翻訳としては許容範囲内と思われる。比較のため掲げた林林訳が、芭蕉俳句の翻訳時と同じく原文に合わせて訳の形式を変える方法を取っており、この句を七五二行で訳出している。二句目の訳は「松の内」を「年初八日内」としたのが読者にとつて分かりやすく、句の内容をうまく現出している。

以下、春夏秋冬の季題順で葛訳を考察する。

【原文】 母の詞自ら句になりて

毎年よ彼岸の入りに寒いのは

【漢訳】 老母出口成章

年年气候俱如此，节届春分寒未消。²¹

子規が主張した「写生」の一つの手本となっている名句である。原文は日常口語をそのまま捉えている形であるが、訳はとくにその点についての考慮はなく、雅やかな漢詩調となっている。

【原文】 連翹に一閑張の机かな

【漢訳】 院里连翹正发花，对花移置一闲机。²²

連翹とは、春の季語である。訳の意味は、「庭に連翹が咲いているので、一閑張の机を花に向かうように置いた」となる。半分ほどは訳者の解釈になっているので、やはり訳者本人が言っている「ルール違反」の憾みが残っている。

【原文】 ふらふらと行けば菜の花はや見ゆる

【漢訳】 信步行未远，菜花入眼来。²³

【原文】 松蔭はどこも銭出す暑さかな

【漢訳】 旅途盛暑心如沸，松阴无处不需钱。²⁴

春と夏の二句である。一句目は非常に流麗な漢詩訳で、二行目の表現が巧みである。二句目の訳の一行目は原文にない内容が補足されているが、読者にとっては必要な情報と言えるので、やはり許容範囲内であろう。

【原文】 御院殿にて鳴雪不折両氏に別る

月の根岸闇の谷中や別れ道

【漢訳】 在御院殿与鳴雪不折两氏分道

根岸月光明，谷中暗里行。

到此须分首，各自就归程。²⁵

秋の句である。訳は五言四行の漢詩となっている。五言訳のみを鑑賞すれば、立派な漢詩であり、葛祖蘭の文才と古典教養が遺憾なく発揮されていると言えよう。ただ訳として見る場合、これほどの長さでは、むしろ原文をもとにした再創作のように思われる。

【原文】 いくたびも雪の深さを尋ねけり

【漢訳】 雪积深何许，几度向人探。

【原文】 障子明けよ上野の雪を一目見ん

【漢訳】 请君开启纸棂门，让我一观上野雪。²⁶

冬季題の二句である。一句目は病床に臥していた子規の名句で、訳は無駄がなく、漢詩としても人を感動させられる出来映えである。

おわりに

葛祖蘭が子規俳句選訳の稿に取り掛かっていた1950年代、中国にはまだ俳句を紹介する中国語書籍がなかったため、訳者はおそらく読者の受け入れを考慮して、訳に「余計な文字」を入れたのであろう。俳句の訳に詳細な虚子解や訳者注を入れたのはその後の俳句の中国語訳になく、訳者の当時の翻訳姿勢を垣間見ることができる。

しかし、二十数年後にやっと出版の運びになった時、すでに林林による『日本古典俳句選』（1982年）および彭恩華による『日本俳句史』（1983年）が上梓されており、状況は大分変わっていた。九十九歳の高齢に達していた訳者は原稿を直す気力がすでになく、「跋」にあるような「弁明」を書いたと推測される。歴史的状况を背景に置いて『正岡子規俳句選訳』を考察し、その価値を判断すべきであろう。

葛祖蘭は上海で日本語教育と俳句教育の両面において多くの弟子を育てたようである。『祖蘭俳存』（増訂版）の「後記」は、出版当時の門下生たちの手伝いに触れており、²⁷ 確かな資料はないが、彭恩華も彼の弟子であると言われている。²⁸

彭恩華『日本俳句史』には、葛祖蘭を紹介する一段落がある。

我が国において、日本語で俳句を創作する人は、まず葛祖蘭を挙げなければならない。氏は三十年代からすでに創作を始めており、近代および現在の日本の一部の著名な俳人と交流がある。氏は日本の著名な俳誌に俳句の発表を

つづけており、句作のレベルが高いため、日本の俳句界から高い評価を受けてきている。1981年日本では氏の俳句集『祖蘭俳存』が上梓されている。²⁹

また、同書の「序」では、「本書の初稿は1966年に完成され、字数は40万強あったが、文化大革命で初稿および貴重な俳句関係書籍が悉く無くなった」と、同書成立の経緯が説明されている。文化大革命前というと、彭恩華はまだ二十代前半であったので、俳句に精通した師の指導がなければ、これほどの大著の執筆は考えにくい。当時両者とも上海に住んでいたのも、筆者の推測では、彭は若かりし時葛祖蘭に師事しており、文化大革命で交流が途絶えたのではなからうか。『祖蘭俳存』の出版年を間違えている所を見ると、少なくとも『日本俳句史』の出版時に、交流が再開されていたいなかったであろう。

ここからも分かるように、葛祖蘭は年齢と経歴によって、亡くなるまで、日中文化交流の晴れの場から距離のある立場に置かれ、「陰」に隠されているという事情が存在する。学術界の雰囲気も変わり、関連資料が徐々に公開されるようになった現在、近現代の日中文化交流に大きな貢献をした葛祖蘭についての研究をさらに深めていく必要を痛感する。

注..

¹ 鄭民欽『日本俳句史』（北京：京華出版社、2000年10月）、四一四～四一五頁。鄭文が依拠する王勇「中華俳翁」葛祖蘭」という文章は未見。

² 『祖蘭俳存』（発行者五十嵐播水、1980年11月増訂版）、「著者略歴」、二二九～二三〇頁。本書は1979年1月に初版を出し、同5月第二刷。

本資料を借覧させていただいた畏友西楨偉氏に感謝する。

本稿では、引用された各資料の漢字表記の一部を通用漢字に変更している。

3 同書。

三木朱城は「満洲」におけるホトトギス派の中心的メンバーの一人であった。『ホトトギス同人句集』（三省堂、1938年12月）によれば、「本名は脩蔵 明治二十六年香川県小豆郡淵崎村に生る。明治四十五年高松商業を卒業すると南満洲鉄道株式会社に入る。（中略）昭和九年ホトトギス同人に推薦さる。（後略）」とある。三六〇頁。

4 「俳句満洲」和「満洲朝日俳壇」と注記されている。同書、四六頁。

5 同書、一七〇一八頁。

6 1943年、日本にとって戦局が厳しくなった故、「満洲」にあった『山楂子』（奉天）、『柳絮』（長春）、『韃靼』（ハルビン）という三つの俳誌が「不要不急」のものとして、『俳句満洲』一誌に統合された。

7 『俳句満洲』創刊号（藝文社、1943年6月）、七七頁。

なお、『祖蘭俳存』（増訂版）では、「植痘瘡子は健やかに母若く」と表記されている。

8 「寝釈迦」なら春の季語となるが、「釈尊」と同じく「字足らず」である。

9 同誌、二二三頁。『祖蘭俳存』（増訂版）に収録されていない。

10 同誌、四五頁。

11 『ホトトギス』における表記は本文の通りで、署名は「新京 葛祖蘭」となっている。新京とは長春のことであり、当時は「満洲国」の首都であった。

ただし、この句は『祖蘭俳存』（増訂版）で見るかぎり、『ホトトギス』と同じ表記で三木朱城選に収録されており、同時に虚子選として「ひのものとの国より月の客二人り」という形で重複収録されている。『祖蘭俳存』（増訂版）、三

六頁、四九頁。実際、この句は朱城選ではなく、『俳句満洲』第四号（満洲公論社＝藝文社、1943年10月）六七頁では、「野村泊月山口青邨氏歓迎句会」の「青邨氏選」に入っている句である。なお、同誌の朱城選（五〇頁）に入った

徳を以て子弟を愛しホ句の秋

が『祖蘭俳存』（増訂版）三七頁に収められているが、同じく同誌の朱城選に入った

舗古し夾竹桃もこの庭も

鳩一つ秋空に飛び屋根に下り

が収められていない。ただし、『祖蘭俳存』（増訂版）三二頁には、

夾竹桃古りゆく庭に灼々し

と、完成度の高い類想の句が載っている。この句は「舗古し夾竹桃もこの庭も」の句と、前出「りらの華古り行く庭をにぎはせり」との二句をベースにして推敲されたものかと考えられる。

12 注1と同じ。

13 『祖蘭俳存』（増訂版）、「著者略歴」、二三〇頁。

14 同書、「五十嵐播水先生序」、七頁。

15 同書、一一二頁。

16 同書、一一七頁。

17 葛祖蘭訳注『正岡子規俳句選訳』（上海訳文出版社、1985年12月）。「訳者の言葉」、一～二頁（本文の前にあり、本文とは頁数の数え方が異なる）。「跋」一七六～一七七頁。

18 同書、「訳者の言葉」、一～二頁。原文は中国語であり、日本語訳は筆者による。

19 同書、一七六頁。日本語訳は筆者による。

20 同書、一八頁。句と訳には番号が振られておらず、おおかた句の年代順に従っている。林林訳は『日本近代五人俳句選』（北京：外国文学出版社、1990年12月）、五頁による。

21 同書、三七頁。

22 同書、一三五～一三六頁。

23 同書、四四頁。

24 同書、四五頁。

25 同書、八三頁。

26 同書、一四四～一四五頁。

27 『祖蘭俳存』（増訂版）の「後記」には、以下の説明があるので、示唆的である。

私の所で日本語と俳句を勉強している学生たちは、初版の印刷後、なお百句以上の入選した句が発表されていないので、私の代わりに整理した上、初版の誤字脱字を直して、「増訂版」として編集した。

二二五頁。留学帰国後長らく日本語教育に携わっていた葛祖蘭の所に、日中国交正常化の前は1980年代とは政治的・社会的状況が異なるとはいえ、学生がいたとは合理的な推測であろう。

28 ネット上の「彭恩華情報」ブログには、署名「李沫来」の文章『記憶與思想之間——隔雨望紅樓』が掲載されており、文中には「友人の彭恩華」と「その師の葛祖蘭」との記述が見られる。

29 『日本俳句史』（上海：学林出版社、1983年7月）、一三七頁。

30 同書。頁数無し。